

LSC NEWS LETTER

Learning Support Center 広島修道大学
学習支援センター

2019 No.29

広島修道大学
Hiroshima Shudo University

Contents

学習アドバイザーの役割—学習相談を原点に—…1 再考 入学準備学習…2 LSCドキュメンタリーアワー報告…4
2019年度後期 ワークショップ一覧と内容紹介…5 大学教育学会 2019年度課題研究集会ポスターセッション報告…6
LSC資料紹介…7 <学び★サブリ>「感謝」と「リスペクト」と“One Team”・まなび commonsでがんばる学生…8

学習アドバイザーの役割 — 学習相談を原点に —



○ 学習アドバイザー
斉藤 幸一

現在、大学教育における学習支援は、各大学の実態に合わせ、リメディアル教育や初年次教育、レポートを始めとしたライティング、英語を始めとする語学学習を支援するものなど多様な展開を見せています。そこに配置されるアドバイザーも、教員、専任のアドバイザー、カウンセラー、準専門職員 (paraprofessional)、学生ピアなど、さまざまです。

本学は、少子化による受験生の減少と入学形態の多様化による学力低下およびリメディアル教育の必要性を背景に、2005年に学習支援センター（以下、LSC）を設置し、学習アドバイザー制度を採用しています。本学の学習支援の大きな特徴は、初年次教育に焦点を当てている点です。ゆえに、学習アドバイザーは、高校と大学との学びの違いに戸惑う初年次生を中心に学生一人ひとりの学びをサポートしています。

2015年、LSCが2号館から竣工したばかりの協創館に移り、新たな出発をしたとき、着任しました。「学習アドバイザー」という初めての職種に戸惑いながらも、まなび commons、まなびホール、まなびラボという協創館に広がる学びの空間を見て、ここで主体的な学びの雰囲気醸成していこうと浪漫が広がりました。以来、5年間、学習アドバイザーとして協創館を拠点に学習支援に取り組んできました。自分なりに学習アドバイザーについて考えてきたことを書き記しておこうと思います。

学習アドバイザーとしてコアとなる仕事は、学習相談です。学習アドバイザーの仕事は、学習相談に始まり、学習相談に終わると言っても過言ではありません。TOEIC®の学習方法やレポートの書き方、プレゼンの準備の仕方など、年間約900件の学習相談があります。学習ア

ドバイザーは、学生一人ひとりの声に耳を傾けることによって、何が課題なのか、一緒に向き合い、その学生に合った解決方法を探っていきます。学生に対するアドバイスだけでなく、時には教員や他部局と連携し、課題解決に当たります。この学習相談が、学生一人ひとりが自らの課題に向き合い、主体的に学ぶ力を身につけるための学習支援の現場です。

この学習相談から、ワークショップや、スタディグループ、LSCハンドアウトなどの学習支援に広がっていきます。例えば、ワークショップは、学習相談の中で質問が多かった内容を、一斉に多くの学生に伝えることができます。スタディグループは、英語や文章のトレーニングのため、継続的に学習相談に通う学生に対して、さらにモチベーションを維持できるようにピアラーニングへと昇華させます。LSCハンドアウトは、自学自習のための教材としての機能もありますが、学習相談において、学習アドバイスの効率化と質保証につながります。このように学習アドバイザーは、学習相談を軸に、多様な学習支援を展開し、主体的な学びの雰囲気を醸成していきます。それに加え、センターオフィスアワーという教員による学習相談の実施が、2019年3月の認証評価にて、まなび commonsでの自学自習の雰囲気が高いという評価につながったのではないかと思います。

今後、大学入試改革や修学支援新制度が導入されるなど、大学を取り巻く環境は、常に変化を余儀なくされます。しかし、いかなる状況下においても、学習アドバイザーは、一人の学生と向き合う学習相談を原点として、「初年次教育を通じた自立（律）的学習者の育成」に努めていくべきでしょう。それをもとに、今まで蓄積してきた学習スキルに関する資料や授業案・教材を活用し、教職協働で学習支援の裾野を広げていくことが、学生一人ひとりの学びを充実させていくことにつながると信じています。



入学準備学習

学習支援センター 森河 亮

本学では、学部生を対象とした9月から11月の間に行われた入学試験での合格者（入学予定者）に対して、入学準備学習を行っています。この入学準備学習は「キャンパス学習」と「通信・課題学習」からなり、「キャンパス学習」は大学での学びや4月からの同級生との学びに慣れること、「通信・課題学習」は本学入学までの期間の学びを継続し、入学後の専門教育へ苦勞なく導入できること、をそれぞれ目的としています。これらについて、近年の入学予定者や、大学を取り巻く状況から、修正を加える必要性また対応すべき事象が出てきているように感じます。それらについて記載しますので、共有して頂ければ幸いです。

まず、「キャンパス学習」についてです。入学前の12月と3月に本学を訪れ、本学のキャンパスで実施されるプログラムです。原則、全員参加が求められます。2016年度までは、12月、3月ともに土曜日開催としていました。しかし、12月はまだ高校に通っているため、土曜日に授業を行っている高校やその他、高校行事がある高校からの入学予定者は欠席せざるを得ず、平均して約1割の欠席者がありました。この状況に対して、2017年度から12月は日曜日開催にしました。その結果、12月での出席率は、98%以上になりました。加えて、2018年度からは入学予定者の家庭の事情などによる欠席を考慮し、3月の開催日を平日に変更しました。3月でも98%以上の出席率を維持しているため、入学予定者の現状に対応できていることが推察できます。ただし、参加している入学予定者の「負担の多少」に関しては、かなりの開きがあるように思えます。

それは、キャンパス学習参加にかかる旅費です。本学の入学者の約8割が広島県内の高校出身者ですが、残りの約2割は広島県外の高校出身者です。山口県、島根県、岡山県や愛媛県が比較的多いですが、距離のあるところでは高知県、長崎県、愛知県、もっと言えば北海道や沖縄県の高校出身者も存在します。これらの入学予定者が、12月と3月に本学を訪れることは、原則参加の入学準備学習とはいえ、かなりの負担になっていることでしょう。

本学と同様に、入学前教育（本学では入学準備学習に相当）として実際にキャンパスでプログラムを行っている他大学の状況を調べてみると、少数ではありますが様々な対応をしています。中でも多いのが、「宿泊費の補助」です。一定の距離以上からの参加の場合、前泊にかかる宿泊費を補助するというものです。1万円を上限とする大学、5,000円を上限とする大学などいくつかのパターンがありますが、実際にかかった費用を証明する領収書の提出を求めるなど、少し手続きが煩雑そうです。これに関して、本学ではセミ

ナーハウスを無償で提供しているため、「宿泊費の補助」は実施できていると言えるでしょう。ただし、セミナーハウスは本学敷地内の一番奥に立地しており、本学周辺には飲食店やコンビニエンスストアも少ないことから、利用者にとってはあまり喜ばれない環境ではないでしょうか。

その他の補助では、「交通費」が考えられるでしょう。しかし、相当数の大学のホームページを調べてみても、中心的な最寄り駅からの無料シャトルバスを出している大学がいくつかあるだけで、交通費の補助を行っている大学は見当たりませんでした。ビジネスホテルの宿泊費は、あまり贅沢な環境を求めなければ5,000円前後に収めることができるでしょうが、交通費に関しては一定の距離があれば、新幹線や飛行機を利用することとなり、1~2万円は確実に必要になります。ましてや北海道や沖縄県からとなると、少なくとも往復で5万円前後は必要でしょう。キャンパス学習参加時の「交通費の補助」、こちらの方が入学予定者の負担軽減に貢献するのではないのでしょうか。

次に、キャンパス学習の「実施プログラム」についてです。基本的に、12月と3月にそれぞれ3つ、合計6つのプログラムで構成されています。学習支援センターからは、本学の教育の特長を理解し、本学で取り組みたいことを見出す「修大生になるために」、日本語の基本的な学習を行う「日本語力アッププログラム」、新聞記事を読み、その内容に関する自己理解を他者の意見と交流させながら深める「新聞から学ぼう」、通信課題で課した英語学習に関して解説を行う「英語プログラム」、の4つのプログラムを提供しています。各学科は、これらを自由に選択し、合計6つのプログラムの構成を考え、決定します。学習支援センターからの提供プログラムは4つですので、各学科は独自のプログラムを最低でも2つは用意することになります。

このプログラム選択に関しては、学科によって様々な独



自性が見られます。学習支援センター提供プログラムの4つすべてを選択する学科もあれば、1つしか選択しない、中にはまったく利用せず、すべて学科独自のプログラムで構成する学科もあります。どちらが良い・悪いということではないですが、このキャンパス学習でどのような学びをさせるのか、どのようなメッセージを入学予定者に伝えるのか、を各学科で再考してみても良いのでは、と感じています。それというのも、かなり強烈なメッセージがこめられたキャンパス学習を展開している大学があるからです。

例を挙げてみると、希望者30名程度に限られています。大学入学前の3月に約2週間の海外留学プログラムを行う大学、1泊2日や2泊3日を大学内もしくは研修施設で過ごし、学部学科の基礎的な学びだけではなく、協調性やコミュニケーション能力などの向上を図りリーダーシップ養成を行う大学、アクティブラーニングの手法を取り入れ、学科の特徴を生かした商品開発・技術開発に関する課題解決型プログラムを行う大学、通信課題ではなくキャンパス学習として国語・英語・数学の基礎学力に関する試験を実施しリメディアル教育の徹底を図る大学、などが存在します。それぞれ内容は異なるものの、参加者には大学からの明確なメッセージが届くことでしょう。

冒頭のとおり、本学のキャンパス学習の目的は「大学での学びや4月からの同級生との学びに慣れること」ですが、上述の事例を見るとそれだけでは少々寂しい気がしています。私個人としては、「各学科のリーダー的素養の養成」を加えてみてはと考えています。キャンパス学習に参加する入学予定者は、同じ新入生の中でも少し先輩になります。キャンパス学習で学科の学びの特長を知り、出身校や出身地の異なる同級生の知り合いもでき、大学生活に必要な情報も早くから収集します。これらの学生が、キャンパス学習に参加していない4月からの同級生を良い意味で巻き込み、リーダーシップを発揮できるようになれば、教職員の方々の教育・指導もより負担なく実施できるのではないでしょうか。このようなことを既に念頭に置かれてキャンパス学習を実施されている先生方には釈迦に説法ではありませんし、誠に失礼な提案ですが、改めて各学科のキャンパス学習の目的・ねらいを再考してみてもどうでしょうか。

最後に、「通信・課題学習」についてです。本学では、学習アドバイザーを中心に国語と英語の学習課題をそれぞれ冊子にまとめ、入学準備学習対象者に送付しています。対象者は、この課題を3期に分けて学習し、それぞれの提出期限までに1期と2期はマーク解答用紙を学習支援センターに郵送し、3期はマーク解答用紙と記述解答用紙を3月のキャンパス学習時に持参して提出します。約600名の計3回の提出確認業務や採点業務は労力を要します。加えて、解答用紙の紛失といった事故も起こりかねません。他大学の入学前教育は、キャンパス学習のようなスクーリングよりも通信やe-learningの方が主流のようです。規

2020年度入学予定者対象
通信学習

入学準備ワークブック

英語・日本語

このワークブックは、高校生から大学生になるまでの、あなたの時間を有効活用してほしい、そして大学生になる準備をすみやかに進めてほしい、という学習支援センターの願いから生まれました。

大学生活では、自分で進んで調べ、指定日まで課題を提出する姿勢、学びをふりかえる姿勢が基本となります。この通信課題学習の機会を利用して、「進んで学ぶ」「期日を守る」「ふりかえる」姿勢を獲得していきましょう。

この「ワークブック」は、英語課題と日本語課題それぞれ3回分から構成されています。

問題が難しいと感じるときは、自分で辞書や教科書を調べ、納得できるまで自分で考えましょう。そして、考えた結果をマークシートや解答用紙に記入して、提出期限までに出してください。なお、マークシートを機械で読み取って、解答状況を採点しますので、折り曲げたり破損したりしないでください。それでは、提出スケジュールに合わせて、課題の分量を考えながら、計画的に取り組みましょう。

【注意事項】

1. この冊子には、英語課題と日本語課題がとじられています。

英語課題 p.5~33 (p.33は記述問題の解答用紙)

日本語課題 p.35~61 (p.61は記述問題の解答用紙)

2. 解答用マークシートが6枚(英語用3枚、日本語用3枚)とふりかえりシート(英語・日本語)が3枚同封されています。

3. 抜けているページや印刷が不鮮明なページがある、解答用のマークシート用紙が不足している、などの場合は、なるべく早く下記までご連絡ください。新しいものを送らせていただきます。

広島修道大学 学習支援センター

【連絡先】

電話：(082) 830-1426

FAX：(082) 830-1427

e-mail: skill@js.shudo-u.ac.jp

【開室時間】

月～金 9:00～16:30

(土・日・祝および

12月29日～1月3日[年末年始休暇]と

2月1日～5日[一般入試期間]を除く)



模が大きな大学になればなるほどe-learningが多く、スクーリングは希望者のみ、というプログラムが多いです。e-learning教材のメリットは、採点や提出管理業務に要する労力が大幅に削減されること、入学予定者がいつアクセスしどのくらいの期間をかけて学習を行ったかが容易に把握できること、学科別・出身高校別・選抜種類別などのカテゴリーによる統計処理が容易に行えること、などそのメリットは大きいように思えます。しかし、当然それ相応の経費がかかります(大学教育学会の企業展示ブースでの説明では、少なくとも数百万円は必要とのこと)。

本学の通信・課題学習の内容は、本学の学生のレベルを想定し学習アドバイザーが毎年微調整を加えながら問題を作成しています。問題の難易度を毎年度同程度に統一することで、新入生の年次変化やその年度の傾向を探ることができます。加えて、2017年度から導入したふりかえりシート(詳細はLSCニューズレターNo.24 p2-3をご参照ください)によって、極めてアナログな(学習アドバイザーが手書きでコメントを記載)、言い換えると温かみのある双方向の学習が進められています。

デジタルの良さ、アナログの良さ、費用対効果、教職員の労力の軽減、リスク管理、など様々な観点から「より良い入学準備学習」はどのようなものなのか、そして、そもそもの「入学準備学習の目的・ねらい」はどうあるべきなのか、再考するべき時期に来ているような気がします。

第69・70回 LSC ドキュメンタリーアワー報告

第69回 客観性につくられる？

— 視覚イメージから考える科学と客観性 —

人間環境学部助教 宮川 卓也



今回は地図や絵、写真などから「科学と客観性」という、やや哲学的なテーマを取り上げました。ドキュメンタリー・アワーで映像を用

いないのは初めての試みだったのですが、私にとっても半ば実験的な講演でした。常識（と思っていること）を揺さぶるのは普段の講義でも心がけていることですが、今回のテーマは特にそれを狙っていました。

ヨーロッパとアラビア半島だけが描かれた古代の地図、想像上の生物の生息地が記された世界地図、左右が完全に対称のチョウのスケッチ、実物以上に鮮やかに着色された植物図鑑のシャクナゲ…古代から近代まで世界各地で描かれてきた自然に関する視覚イメージは、各時代の人々の想像力、世界観、科学的知見や作図・作画技術、さらには政治的背景も反映された科学の成果です。それらは現代人の目からすれば「客観性」からほど遠く、滑稽にさえ映るかもしれません。しかし古い時代だからと、「非科学的」で「非客観的」と断じられるのでしょうか。

現代のものはどうでしょう。南北が反転した地図、欧州が中央にある地図、正距方位図法で描かれた地図…どれも見慣れない、「何かおかしい」と感じてしまう地図ですが、どれも科学的な手法で描かれており、その意味で「客観的」であるはずですが。なのにそう思えないのは、私たちがもつ「科学＝客観的・中立的」という強い先入観と「ズレ」があるからです。過去と現代を問わず、科学的イメージは作成者（依頼者）の知識、意図、世界観など、ある種の主観が込められています。同様に、見る側の知識や立場もイメージの「客観性」を左右します。つまり少し視点が変わるだけで、客観性（と思っているもの）は揺れ動くのです。何をもち「客観的・中立的」とするのか、その線引きは至難です。科学は万能ではないのです。「客観的データ」や「科学的根拠」と呼ばれるものは、はたして本当に客観的で中立的でしょうか。それを考えるきっかけになればと思いながら話を進めました。授業でも常に「常識」を揺さぶる問いを投げかけていきたいと思っています。

第70回 ハーヴェイ・ミルク

— アメリカでゲイを公言して
はじめて政治家になった人の物語 —

人文学部教授 河口 和也

『ハーヴェイ・ミルク』は、1984年に制作されたかなり古いドキュメンタリー映画です。ミルクは米国で初めてゲイであることを公言してサンフランシスコの市政執行委員に当選した政治家です。1970年代初めから数度にわたり選挙に出馬し、1977年ようやく当選したミルクでしたが、翌年、当時の市長とともに市庁舎で元同僚議員に殺害されてしまいます。彼は性的少数者だけでなく、他の様々な少数者の権利を擁護し、サンフランシスコという街を多様な人びとにとって生活しやすい場所にしようと尽力しました。そうした功績は、米国のオバマ前大統領にも多大な影響を与えました。近年、世界的には、性の多様性やLGBTという言葉で、性的少数者の存在が注目され、様々な取り組みがなされるようになってきました。そうしたことがこの時代に実現されているのも、過去にミルクのような人物が存在し、歴史の中に礎を築いてきたからでもあるでしょう。



こうした歴史的経緯を経て、サンフランシスコ市は、米国だけでなく、世界でも多様性に対して寛容さを備えた名だたる都市となったことも確かです。都市社会学者のリチャード・フロリダは、創造性は自由と寛容さを備えた都市で花開くと言っています。シリコンバレーを背景としたサンフランシスコは有数のクリエイティブ都市のひとつです。しかし、ミルクが政治家となった1970年代から40年を経た今、シリコンバレーのIT産業のバブル経済による家賃や物価の高騰により、この街は世界でもっとも生活しにくい場所のひとつとなってしまいました。所得の低い人種的少数者や性的少数者は、家賃の高さから街やコミュニティから出て行かざるを得ない状況もあるようです。ドキュメンタリーアワーでは、私が数年前に研究のため滞在していたカストロというゲイコミュニティの状況も含め、社会変革がもたらす意図せざる結果や矛盾についても触れました。今後、私たちにとって望ましい社会を構想するとき、歴史を振り返って考えてみることも重要となるでしょう。

2019年度後期

ワークショップ一覧と内容紹介

学習支援センターでは、主に初年次生を対象に、大学で学ぶために必要なスタディスキル全般や英語の講座を開催しています。2019年度後期は、以下のとおり実施しました。

2019年度後期ワークショップ一覧

日時	タイトル	日時	タイトル
9/3(火)	後期の目標を立てよう！—9×9マンダラートを使って—	10/8(火)	プレゼンの練習をしよう！—伝わりやすい話し方で差をつける—
9/17(火)	日本語検定講座 —なぜ富士山は「さん」なのに、比治山は「やま」なの？—	10/10(木)	トラブル!? トラベル英会話
9/19(木)	TOEIC® L&R Test 講座—めざせ600点！編—	10/17(木)	大学1年生からはじめるテツガク
9/26(木)	「読む」ことから始める英語—多読学習のススメ—	10/24(木)	君にも書ける短編小説—発想編—
10/1(火)	プレゼンの準備をしよう！—資料の見せ方で差をつける—	11/7(木)	「問い」の立て方—思考力を鍛える—
10/3(木)	キソ！エイ！GO！	1/6(月)～1/10(金)	学期末！レポート相談 WEEK
		1/9(木)	試験準備ミニ講座

「プレゼンテーション」のワークショップについて

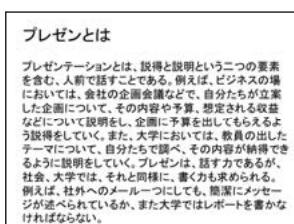
大学の授業では、高校よりもPCを使って資料を作成し、皆の前で発表する機会が多くなります。学習支援センターではプレゼンテーションスキルに関するワークショップを提供しています。ここでは、その実施した内容を紹介합니다。

▶ プレゼンの準備をしよう！

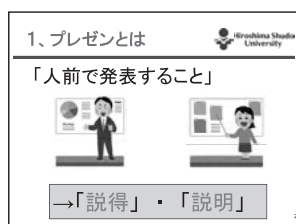
—資料の見せ方で差をつける— (10/1実施)

ここではまず、よくありがちな残念なスライドを見て、どこが伝わりにくいのか、考えました。例えば、文字が多すぎる、文字で示すより図解したほうがよい、グラフが適切でない、文字の配置が大きさや配置を工夫した方がよい、などの意見が出ました。相手に伝えるツールとして、スライドのデザインを検証し、スライドの見せ方を学びました。

残念なスライド



改善したスライド



そして広島の魅力というテーマのプレゼンをする場合、どのようなスライドを作ればよいか、3枚程度のスライドの下書きをしました。先ほど学んだスライドを作る際のポイントを踏まえ、スライドごとのメッセージが伝わりやすいように文字や写真の配置や大きさを工夫して、手書きでデザインします。最後は、お互いの下書きを見せ合い、評価するピアレビューも行い、よりよいスライドになるように話し合いをし、気づきを促しました。

参加者の声 「シンプルが一番！」「プレゼンの相手へ、どう働きかければよいのか分かった」

▶ プレゼンの練習をしよう！

—伝わりやすい話し方で差をつける— (10/8実施)

ここでは、PREP法とストーリーという二つの話し方を学び、練習しました。まず、論理的な話し方としてPREP法があります。これは、相手に伝わりやすい話の順序で、Point (主張・結論)、Reason (理由・根拠)、Example (例)、Point (主張・結論) で構成されています。学生たちは、「地元に来る人に誘う」というテーマで、PREP法で話す内容を整理し、発表しました。

次に、感情に響く話し方として、ストーリーについて学んでいきました。ストーリーには、きっかけ (スタート)・目的 (ゴール)・課題 (困難)・変化 (成長)・タイトル (意味づけ) という5つの構成要素があります。「自分自身が困難を乗り越えたこと」をテーマに、山頂に登ったこと、グループ学習をしたことなどをドラマティックに話してくれました。

最後に、PREP法、ストーリーは、プレゼンをする場面、意図によって使い分ける、もしくは組み合わせることが重要であることを確認しました。

参加者の声 「非常に楽しかった、もっと長時間受けたい」「これからのプレゼンをするときに生かしていきたいです」

参考：吉藤智広、渋谷雄大著 (2019) 『伝わるプレゼンの法則100』大和書房
杉田祐一、谷田昭吾著；野呂幾久子編 (2019) 『プレゼンテーション実践トレーニング』ナカニシヤ出版

大学教育学会 2019年度課題研究集会

ポスターセッション報告



学習アドバイザー 是澤 克哉

2019年11月30日(土)と12月1日(日)にエリザベト音楽大学(広島市)で開催された大学教育学会2019年度課題研究集会に学習アドバイザー3名(齊藤、松村、是澤)が、「入学前教育におけるふりかえり支援—入学準備プログラムでの学習支援センターの試み—」という題目でポスター発表を行った。ここでは、発表をふりかえりながら、学習支援センターが提供する通信学習(「入学準備ワークブック」)で、2017年度の導入から3年目を迎えた「ふりかえりシート」の効果を分析し、早期入学予定者に対する学習支援の可能性と課題について報告する。

「入学準備ワークブック」と「ふりかえりシート」——

「入学準備ワークブック」は、英語・日本語それぞれに3回の課題の提出が設けられ、各100点満点で採点される通信学習である。一回目と二回目は、マークシートのみだが、三回目はマークシートと記述解答用紙を提出させている。過去の点数の推移をみると、2016年度まで成績が年々下降していることが分かる(図1参照)。そこで、入学予定者が入学までの数ヶ月間、継続的に学習するための仕組みが必要だと考え、「ふりかえりシート」を2017年度から導入した。このシートに「重要な点」、「分かりにくい点」、「不明な点をどう解決したか」を記述させ、3回分の課題に対し、自らの学習を省察する機会を設けた。提出されたシートは、学習アドバイザーが手書きでコメントを加え、課題の成績とともに返却している。このことで、学習者との対話を促し、継続的な学習支援につなげようと試みた。

ポスター発表とLSCのふりかえり支援——

当日は、多くの観覧者に恵まれ、50部用意した冊子のほとんどを配ることができた。発表の構成は(1)入学準備学習プログラムの概要、(2)ふりかえりシート導入の経緯、(3)ふりかえりシートのパターン、(4)コメント例、(5)考察と今後の課題の順で説明した。また、ポスターには、特徴のある3名の学習者の「ふりかえりシート」をそれぞれ3回分の計9枚貼り、学びの変遷をたどった。語句のみの記述から文章を成すようになった点、表層的な記述から思考のプロセスが分かる記述に深化した点、一日で終わらせていた課題を時間をかけて計画的に取り組むようになった姿勢の変化などを例にあげて説明した。このように学習者の記述内容が改善した要因には、アドバイザーが「ふりかえりシート」を読み、感じた内容を丁寧に記述し、思考を促すコメントを心掛けたからではないかと考えられる(下記はコメント例)。

- ◆ 記述が少ないシートに対して → 全体的にもっと具体的に詳細な分析が欲しいところです。入学後を見据えて今の自分に必要なものは何かと考えていくと、各回の課題で違う気づきがあるはずです。
- ◆ 分かりにくい点を「辞書で調べて解決した」と答えるシートに対して → 調べたら分かる問題は本当に分かりにくい問題でしょうか？
- ◆ 「スマホの翻訳機能で単語をすべて訳した」というコメントに対して → 精度が粗いので注意。対訳だけではなく、調べた語彙で例文を書いてみよう。

通信学習に省察するプロセスを組み込んだことで、学習者それぞれの取り組み方を知ることができ、それにより具体的なアドバイスを提供できるようになったことは大きい。たとえば、英単語を調べる際に「それぞれの単語の役割もメモしよう」とコメントした次のシートには、単語の用例まで調べられたシートが届き、対話から学びが深化する様子がうかがえた。また、平均点の上昇からも「ふりかえりシート」が学習者の学ぶ姿勢の改善に一定の効果があったことが示唆される。発表では、観覧者から本学の入学準備学習に関して、概ね肯定的な意見が多かったが、「入学後の学業にどのような効果があったのか」と尋ねられるなど今後の検証が必要な課題も明らかになった。

発表を終えて——

これまでの学習支援センターの活動をふり返る中で、本学の入学準備学習プログラムを課題研究集会の場で紹介できたこと、また、専門分野がそれぞれ異なる学習アドバイザー3名が協働して発表を行えたことは、大変意義のあることだった。たとえば、発表の準備段階で、3人がそれぞれの「ふりかえりシート」を読み直し、自らのコメントを批判し、共有し、省察していく中で、新たな発見や学びも多かった。今思えば、入学予定者に課した「ふりかえりシート」がアドバイザー自身の仕事の省察につながったことも意図していないことだった。最後になるが、発表に際し、アドバイスをいただいたり、当日会場まで足をお運びいただいた皆様、そして学習支援センターの仲間たちに、この場を借りて、感謝申し上げます。

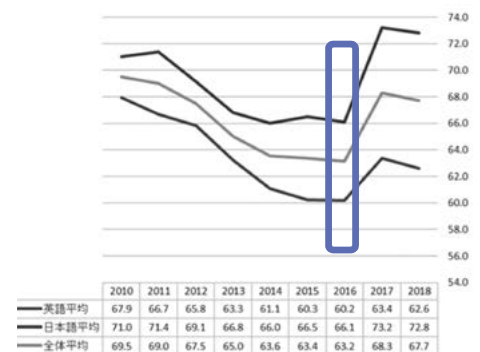


図1 ワークブック年度別平均スコア

LSC資料紹介

学習アドバイザー 是澤 克哉

学習支援センターでは、大学教育、初年次教育、アクティブラーニングや授業手法などに関する図書を収集しています。貸出もおこなっていますので、気軽に学習支援センター（協創館1階）までお問い合わせください。

『A Handbook of Reflective and Experiential Learning — Theory and Practice』

Jennifer A. Moon 著 / RoutledgeFalmer (2004年)

英語の reflective は「反射（反映）する」、「反省する」、「省察的な」、「ふりかえり」と訳されるなど多義的です。このことばは、John Dewey (1910) の『思考の方法』で提示した反省的思考 (reflective thinking) に由来し、個人の内面に見出された課題に対し、連続的に思考し、課題解決に向かおうとする思考のことを「省察」と定義したことで意味が深まりました。日本では「反省」という否定的な文脈で用いられることが多くありますが、現在では、教育の質的転換が求められ、「reflective」はどちらかという肯定的な意味で再定義されています。最近では、2017年の文部科学省の「新しい学習指導要領の考え方」において、主体的・対話的で深い学びの実現の中で、ふりかえりの必要性が論じられています。また、学習支援センターでも入学準備学習の通信学習で「ふりかえりシート」を導入し、早期入学予定者に省察する機会を設けるなど、自立的な学びを促す一助として活用しています。そこで、今回は「ふりかえり」ということばに着目した省察理論の第一人者である Jennifer A. Moon の著書を紹介します。

題名にもあるとおり、本書は手引き (handbook) であるため、実用的な構成になっています。全体が第三部からなり、第一部では、学びにおける普遍的な見解を示し、学びの過程や枠組みについて概観しています。第二部では、省察的及び体験的な学びの探求と題し、第一部の議論を掘り下げた膨大な文献を精査することで、省察的な学びの本質に迫っています。第三部では、省察的及び経験的な学びをどのように導入し、評価し、質を保証していくのかがまとめられています。巻末には50ページほど、複写可能な付録 (Photocopiable Resource) があり、省察的な記述 (reflective writing) の具体例や省察理論の実践例を知ることができます。

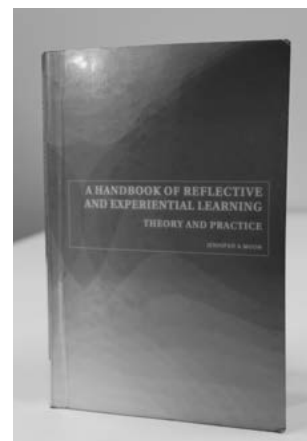
省察理論は、Donald Schön や David Kolb などが知られていますが、Moon の省察理論は、実践的・経験・臨床的な Schön や Kolb の理論よりも、よりアカデミックな文脈におけるふりかえりに重点が置かれていま

す。著者は大学における学生の学び (student learning) を主な研究対象としていて、体験させて終わらせるのではなく、省察のプロセスから学ぶ重要性を指摘し、それを「省察的な学び (reflective learning)」と位置づけています。

Moon の省察理論の特徴は、ふりかえりは質の高い学習プロセスの一端を担うと同時に、学習態度にも影響を及ぼすと理論づけていることです。たとえば、下記のような記述があげられます。

- 1) ふりかえりは、学習の進度にゆとりを持たせる。
- 2) ふりかえりは学習の当事者であるという意識 (sense of ownership) を養う。
- 3) ふりかえりは「メタ認知」を促す。自らの長所と短所、学習プロセスについて気がつき、ふりかえることのできる学習者は、より多くを学ぶ。(著者拙訳、p.86)

とらに、感情もふりかえりの対象となっている点も興味深いです。つまり自身の体験に基づき、そこで感じたことを、どのように書き記すのかという手順を「省察的な記述」として紹介し、ふりかえりは常に自身について行われ (it always concerns the self)、第一人称で語られると結論付けています。このように、Moon の省察理論は、ふりかえる過程について、詳細に描写され、体系づけられています。残念ながら本書の日本語の翻訳はありませんが、教育現場で、教員として、もしくは学習者として、学ぶためのふりかえりを理論に基づいて効果的に実践するための指南書となっています。



<学び★サプリ>

2019 Vol.17

「感謝」と「リスペクト」と“One Team”

学習アドバイザー 松村一徳

2019年の流行語大賞は“One Team”でした。ラグビー大国とは言い難い日本代表の活躍と全国的な盛り上がりは世界に強烈なインパクトを残しました。多国籍の選手・コーチ陣で成り立っている日本代表を支えた言葉“One Team”は多くの共感を呼び、大会を終えても巷で使われ続けています。

15年ほど前にニュージーランドへ行く機会がありました。ニュージーランドと言えば「オールブラックス」で知られるラグビーの伝統国ですが、多民族国家でもあります。ちょっと街を歩いても、南太平洋系の先住民、ヨーロッパ系、アジア系、アフリカ系といったあらゆる人々を見ることができました。そのような国で、まして国技を背負うオールブラックスが“One Team”にまとまるのは非常に至難の業であろうと思われます。

また、ラグビーワールドカップ日本大会で優勝したのは南アフリカでしたが、この国もまたラグビーの伝統国であり、かつ非常に多様な人たちが集まった国です。南

アフリカキャプテンのシャ・コリシ選手は優勝スピーチで次のようなことを言っていました。「南アフリカは多くの問題を抱えていますが、このチームのように、異なるバックグラウンドや異なる人種が、共に集い共にゴールを目指して協力すれば、一つになれることを示したかったのです。ホームレスの人、貧しい地方の人々、すべての人に感謝します。」日本とは比べ物にならない多様な状況の中で、本当の“One Team”を作り上げたキャプテンの苦労はいかほどのものだったのか、私には想像することもできません。

ニュージーランドや南アフリカの選手の発言を見ると、そこには「リスペクト」と「感謝」というキーワードが見取れます。シャ・コリシ選手の優勝インタビューは、多くが祖国の人々や対戦相手、そして日本の人々への敬意と感謝で占められていました。“One Team”をつくることは、そういうことなのでしょう。

<学び★サプリ>は学習支援センター掲示板で読むことができます。

まなびコモンズでがんばる学生

苦手なことに取り組めた場



小林 樹

(人間環境学部 人間環境学科)

まなびコモンズでは毎週火曜日のスタディグループ「キソエイゴ」で英語の勉強をしています。リスニング、発音、シャドーイングなどに取り組みました。また、まなびコモンズのパソコンを使ってレポート作成や、テスト勉強の際に利用しています。そして、学習相談としてTOEIC Bridgeの勉強もやっています。テストの際の時間配分や、文法問題、長文問題などについてアドバイスをもらい、間違ったところを復習すると解ける問題が増えていきました。1月に大学で行われたTOEIC Bridgeでは特に文法問題がよく解けたと思います。まなびコモンズを利用して良かったのは、苦手な英語の勉強を続けやすかったところです。スタディグループは30分と短く、一緒に取り組む人もいて、英語の勉強を続けることができました。継続できて良かったと思います。

まなびコモンズの上手な利用の仕方



丹下 佳乃

(国際コミュニティ学部 国際政治学科)

私はまなびコモンズで英語学習と日本語検定の勉強会に参加しています。英語学習は、毎週火曜日のスタディグループに参加するか、水曜日の4限の時間に学習相談を受けています。TOEICで点数を上げるための勉強をしています。昨年6月頃に友達に誘われ、参加することにしました。そのおかげで、夏休みに受けたTOEIC Bridgeで20点ほどスコアを上げることができました。日本語検定の勉強会は、毎週金曜日の昼休憩の時間に30分ほど行われています。外国人に日本語を教える仕事に興味があり、昨年の秋頃から勉強を始めました。留学生と話す時、難しい日本語を言うと言いたいことが伝わらず相手が困ってしまうことがあります。そのような苦勞を減らすことができている。来年度になっても学習を続け、夏にある日本語検定を受けようと考えています。



Hiroshima Shudo University

Learning Support Center
LSC NEWS LETTER
広島修道大学
Hiroshima Shudo University

発行日 2020年3月27日

発行者 広島修道大学学習支援センター

〒731-3195 広島市安佐南区大塚東1-1-1 TEL.(082)830-1426

E-mail skill@js.shudo-u.ac.jp

©LSC NEWS LETTER はホームページでもご覧になれます。